

氏名	う た ひろし 宇 多 浩
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 262 号
学位授与の日付	平成 16 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	知覚と志向性

——フッサール現象学における知覚理論——

論文調査委員 (主査) 教授 小川 侃 教授 富田 恭彦 助教授 佐藤 義之

### 論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文の目的は、フッサール現象学における知覚の現象学的なあり方を、その根底にある志向性との関わりにおいて通時的に考察することである。

まず第一章では、前期の著作『論理学研究』(1900/01)での知覚と志向性のあり方を検討している。知覚とは統一的な事物をありありとした仕方では現出させる働きであると同時に、それをある何らかの意味において把握する働きである。『論理学研究』において知覚の持つこれら二つの側面は、感覚内容の意味解的な働き(統握作用)とそれによって可能になる事物の現出作用として捉えられていた。そしてこれら二つの働きを統一的に理解することを可能にしていたのが、代表象(Repräsentation)という概念である。感覚内容を意味的に解釈する統握の働きは、感覚内容に意味を結びつけ、感覚内容と事物の契機との間に前者が後者を代表するという関係を作り上げるという機能を有しており、それゆえそれは代表象と呼ばれていた。『論理学研究』において知覚における事物の現出は、この代表象の機能によってはじめて可能になると考えられていたのである。『論理学研究』において知覚はこの代表象という形式を持つ部分志向の総体と考えられており、その中で統一的な事物の現出が可能になると考えられていた。だが知覚をこうした感覚内容の意味解釈や代表象の働きとして捉える見方は、知覚のあり方を適切に記述したものではない。というのもそれらは本来、言語的な意味理解の構造を説明するのに適したモデルを知覚に適用することによってもたらされた見方であり、そのことは結果的に事物の「ありありとした現出」という、知覚に固有のあり方を覆い隠すことになったからである。ところで以上のような知覚の捉え方は、志向性に関する彼独自の考え方に密接に関連している。というのも、知覚を代表象として捉える見方の根底には、作用の对象的関係を、作用に内在する意味的な契機である質料のもつ対象指示的な機能によって説明しようとする見方(志向性の指示論的な見方)が存していたからである。

この点を踏まえて以下の章で申請者は、これらの知覚と志向性に関する理論が『論理学研究』以降、現象学独自のものへと変遷していく過程を通時的に検討する。

第二章で申請者は、志向性に関する分析が新たな展開を遂げていくことを示すために、『論理学研究』以降のゲッテンゲン講義を順次、通時的に再構成した。1906/07年の講義『論理学と認識論』において現象学が新たに〈純粹現象〉という不可疑の明証性を持つ領野を自らに固有の主題領野として所有するに至ることが示された。この純粹現象という領野は、〈体験としての現象〉と体験の中で思念され、与えられた限りでの対象である〈存在的現象〉という二つの契機からなる相関的な構造を有しており、志向性もまた、この純粹現象における相関性という新たな枠組みの中で分析されることが可能になる。

本論文第三章では、1907年の講義『物と空間』での知覚理論が検討される。申請者はそこで知覚は単なる部分志向の総体からなるだけでなく、事物の現出を可能にする志向の統一的な体系を形成していることを明らかにする。

そこで次に第四章で課題となるのは、この新たな考察様式の枠内で志向性の具体的な構造を明らかにすることであるが、その課題はまず、上記講義の翌年になされた『意味論』講義(1908)において着手された。複数の名辞的表象は判断作用の

中に組み込まれ、その中で同一性の連関を形成しているが、フッサールによればこれら個々の名辞的表象のもつ対象的關係は、判断において機能する可能な同一性連関の中で初めて可能になるものである。だが他方、この名辞的表象には〈意義されたものそのもの〉という契機（これは〈存在的意義〉と呼ばれる）がその相関者として対応している。そこで上記の対象的關係の構造はこの存在的意義の観点からも記述することができる。この観点をとる場合、作用の対象的關係は、個々の名辞的表象に相関する存在的意義どうしの間で成立する可能な同一性連関の中で可能になるといえる。以上のような作用の対象的關係を意義作用と存在的意義において機能する同一性連関の構造に求めようとする考え方が、前期の指示論的な志向性概念に代わる新たな志向性の概念を提供している。

こうして『意味論』講義では作用の同一性連関に定位した新たな志向性の構造が提示されたのだが、第五章では、その後の『イデーニ I』（1913）でこの志向性の構造が純粹意識の本質的な構造として捉え直されるようになる事情が詳しく分析される。ここにおいて作用の対象的關係とは、一般に次のような構造をもつ。まず自我が互いに総合的に連関しあうノエシスの多様を貫きつつ機能し、ついでノエシスの多様と相関的に連関しあうノエマの多様を貫いて作用するということ、さらに絶えず同一のものとして構成される対象  $x$  へと自我が関係するということである。ここにおいて志向性の概念は、超越論的現象学を支える最も基礎的な概念へと彫琢されるに至ったのである。

さて以上の志向性概念の発展に対応して、知覚の概念も大きな転換を遂げることになる。すでに申請者は第三章で知覚が志向の統一的な体系をなしていることを明らかにしていたが、この解明にもとづいてこの志向の体系としての知覚の構造を1920年前後の講義『受動的総合の分析』での知覚理論を手がかりにしてさらに詳細に分析した。第六章で申請者はこの講義での知覚理論を検討し、そこで知覚はそのノエシス-ノエマ的な総合連関の中で統一的な事物を構成する超越論的な構成能作の体系を形成していることを明らかにする。このような知覚観に到達して初めて、フッサールは知覚を事物現出という知覚に固有の場面に即して考察することができるようになり、前期の言語論的に定位した代表象理論から解放されたのである。

だが他方で知覚は、このように統一的な事物をありありとした仕方では現出させるという側面だけでなく、事物の意味的な把握という側面をも有している。この側面を超越論的な観点から改めて説明しようとしたのが、後期の発生論的な知覚分析であったといえる。知覚は空虚な志向を充実する動的なプロセスを形成しており、この動的なプロセスの中で絶えず事物の類型的な意味が構成される。ここにおいて知覚とは、事物の個別的・一般的な意味を構成する知の動的なプロセスをなしていることが明らかになり、知覚の二側面は、事物、および事物の意味を構成する超越論的な構成能作の全体体系の中に組み込まれることができたといえる。

## 論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、20世紀の哲学運動である現象学の始祖、フッサールにおける知覚の現象学的分析を研究対象としている。本論文がとる研究方法上の形式的な特徴は次の二点である。(1)フッサールの知覚論を彼の哲学の発展の過程に位置づけながら通時的に明らかにしようとする発展史的観点をとっていること。その際に（ヘルトなどの）「現出理論としての現象学」のフッサール解釈を目標にしながらたんに『論理学研究』と『イデーニ I』の間の最近公刊された諸講義をも考察し直していること。(2)特に、知覚における諸々の部分的な作用をひとつの統一的な対象  $x$  へと総合する同一化総合の働きを志向性概念との連関で分析し、これを(1)の通時的分析の道具とすることによりフッサールの知覚理論の到達点と限界とを明らかにしようとしていること。

以下ではこの二つの形式的特徴が本論文においていかなる具体的な成果に結びついたかを述べることで、本論文のフッサール知覚論研究における意義を明らかにしたい。

まず、(1)について。フッサール知覚論に関する発展史的考察は、従来のフッサール研究においても当然なされている。しかしそれらの多くは部分的・概観的な考察にとどまり、『論理学研究』から『イデーニ I』のあいだの最近公刊されたフッサールの一連の講義などの一次文献の詳細な考証にもとづく通時的な考察はほとんどなされてこなかった。それに対して本論文は、フッサールの知覚理論とその問題点を、主要著作はもちろんのこと、これまで特に日本の文献ではあまり言及されてこなかった三つの浩瀚な講義（『論理学と認識論入門』講義（1906/7）、『物と空間』講義（1907）、『意味論』講義（1908））を知覚と志向性というテーマに即して徹底的に検討したものである。本論文の志向性概念を中心とした知覚に関する

る文献にもとづく現象学的考察は、今後の現象学的な知覚理論の解明にとって重要な貢献をなしていると思われる。本論文の分析はフッサール全集の深く透徹した理解に裏付けられた極めて緻密かつ説得力に富むものであり、上記三講義の分析以外にも、『論理学研究』第二巻（1901）の第六研究、『受動的総合の分析』（1918-26）においてなされた知覚理論に対する批判的な考察は、他に類例を見ないほど詳細にわたるものである。本論文で示された知覚概念の通時的な考察は、フッサール現象学を規定している現出理論の枠組みとその通時的な動向を知る上で、重要な貢献をなしている。

(2)について。知覚は現出する事物への意識の志向的な関わりであるから、知覚の構造分析はその根底にある志向性分析と切り離せない。また、知覚とは、互いに緊密に融合しあう部分志向からなる志向の全体的・統一的な体系であり、同一化総合は部分射映(Abschattung)の連続的な遂行の中で統一性を獲得する。この統一化を経て事物のありありとした現出である知覚が可能になる。この意味で志向性と同一化総合はともに知覚の核心的な部分を担っているといえる。

このような観点から本論文は、(1)でも述べた志向性概念の綿密な検討にもとづいて、フッサール知覚論の発展のなかでこの同一化総合がどのような形で扱われているかを分析する。フッサールは知覚論のうちに同一化総合を十分に組み込むことができているために知覚論の各発展段階で知覚論の枠組みの組み替えが必要となっている。この同一化総合についてのフッサールの分析の進展が、フッサールの知覚論を統握-統覚理論から、ノエシス-ノエマ並行論、さらには現出理論へと移行させる発展の動因となっている。申請者は詳細な文献的考察により裏付けられた説得的な議論によってこの主張を根拠付けている。特に申請者は、『意味論』講義で志向性概念がノエシス-ノエマの相関にもとづく同一性連関の観点から明確に考察されるようになり、そのような新しい志向性概念が初めて知覚の現象学的理解を可能にしたと指摘しているが、これは傾聴すべき創見だと言えよう。

このように、志向性概念との連関における同一化総合と分析という全体を一貫する軸によって、本論文の通時的分析は単なる歴史的発展史的記述にとどまらず、フッサール現象学の現出理論的な解釈という体系的テーゼをもつものとなりえており、フッサール知覚論の新たな像を呈示することに成功している。

たしかに例えば『イデーニI』の頃の静態論的な能動的構成と、のちの「受動的総合」概念に裏付けられた力動的な発生的構成との相違もしくは関係が十分に論じられていないことなど不十分な点を含まないわけではない。しかしながら上述のように、本論文はフッサール知覚論の広範かつ詳細な文献研究にもとづくとともに、最新の二次文献の研究成果を積極的に取り入れており、今後のフッサール研究の一方向を示唆する、可能性に富む意義深い研究であるといえる。なお、本論文を構成する各章は、すでに学会誌等に掲載され、高い評価を得ている。

また、本学位申請論文は、人間の全体的現実を環境との関わりに沿って解明することを目指して創設された人間・環境学専攻人間存在基礎論講座の理念にかなったものと言える。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年9月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。